

先づ御目録の通被下候旨にて、判金五枚被下之、其以後御前へ被召出御意等有之候。

元昭へ餞別に兩首遣之

露しげき道の芝生に思ひ出よしたひて残る秋のたもとを
我もまた思ふかたとて故郷にかへる袂はとどめかねつゝ
又あふぎを遣すとて、書て添侍りける。

今はとてわかるゝ袖の慰めはめぐりあふぎをそふる斗ぞ

一、述懐の歌五首

二十四日今曉聞鐘聲おもひを述て云。

聞人のこゝろやちゞにかはるらんおどろかさるゝ曉の鐘
思ひわび我のみならぬ慰のいく度つもる憂世なるらん

寄草述懐

秋草に結びし露の身にしあれば従がふ風をよくる方なき

寄露述懐

草の露きえぬ限りは秋風にみだるゝごとき身にも有かな

駒込へあかつき方、とみのこと候てまかりける道にて。

身のほどの憂を思へば是はやこの世につながるゝ駒込の里

一、室鳩巢と贈答の詩歌

欲曙郎君顛倒裳、自公來召吏人忙。中庭若使鉏麴看、不惜碎頭槐下僵。

鳩巢主人 室 直 清

余詠一首以謝之

鳥鳴てまつ曉はかたくともつかふる道になづますもかな
一、重 陽

契きな千とせの松の下露をかけてぞにほふ庭のしらぎく
またわたくしの宿の菊に對して

かりの世にまた假寝する我宿の菊は色香を忍ぶばかりぞ
きのふ駒込よりまかりける道にて、染つくしたる梢ど

ものおほくつゞきたるに、尾花の打しをれて立まじり
ける野の氣色、いとをかしかりけるを、過ぎがてにして

詠侍りけるに、猶わすれがたくて、今夜月も影清く澄
渡りけるまゝ、下露の色も一しほになど、思ひつゞけ

侍けるまゝ。

昨日みし野邊の紅葉の月影にかばかりこそ照増るらん
雨はるゝ夕の雲の立かへり見てもみまくのほしき紅葉は

染つくす梢をこむるきりの海くれなゐ深き浪とこそみれ

一、九月十三夜

はれやらで今宵明なば長月の長くや月をつらしと思はむ
わきてこの暮とぞ月を松の戸に思ひもしらぬ雨の聲かな

いとせめて月の都に告げやらむ待し今宵の雨のつらさを
いかなれば名におふ月の花蔓今夜をかけて雨をゝぐらん

うらみ侘ぬ半の秋のつらさを忘れんと待し月も曇れば
長月や空しき名のみたつ雲のいくへばかりの恨なるらん

名にしおふ月の光におく霜のしろきを後の菊のうはつゆ

一、菊池武康述懐の歌

武康此度の愁鬱の餘り、獨り打嘆きてよめるよしにて。

諸共に老來しものをいつ迄の世に残れとや後らされけん

一、徒然のあまり

二十七日。今夜徒然の餘、於燈下五首の詠。

春

こす巻て詠めし雪のおもかげもおもひしらるゝ山櫻かな
さく花の雲井にまよふ聲すなりこし路忘れぬ春の雁が音

夏

百千どりと□やなくらん五月雨のふりせぬものか山郭公

秋

霜むすぶ芝生の秋の夕日かげうつるも弱き虫のこゑかな

冬

ふどきする冬の日かげの吳竹にやどりかねたる村雀かな

戀

逢ぬ夜も逢夜もつきぬ思ひこそうとみやすらん袖の月影

暮秋の月

草木だにたへずや露にしをれけり暮行く秋の夜半の月影

月前戀

おもひ艸露にみだれし夕より知らじいく夜のそでの月影

九月盡

明日からは冬野に色や亂るべき秋こそしめし山の紅葉は
露霜に染めし紅葉のから錦たれにつたへて秋のいぬらん